7

ST

　男が家を出ると子供たちが待ち構えていた。「ST、話をしてよ」「うるせえ。失せろ」「ねえねえ」「STって呼ぶな。おれはストーリーテラーじゃねえ。ストーリーセラーなんだ。お前らに話をしても一銭の得にもなりやしねえ。いいかよく聞け」子供たちは息を呑む。男の話はいつもこうして始まった。

即席彼氏

　即席彼氏を買ってきた。湯を注いで三分待つとカップから頭が生えてくる。見る見る間に身体も膨らみ私の目の前に立派な彼氏が現れる。だが彼は何故か無表情だった。話しかけても機械的に返事をするばかり。がっかりだった。生ゴミに出そうとして気づいた。感情の素を入れ忘れていた。

家出

　パンツが家出した。全員だ。困った。風呂上がりなのに穿くものがない。ふと机を見ると書き置きが残されている。「乾燥機の導入以来、我々は日光浴もできません。お日様が恋しいのです。パンツ一同」俺は一人取り残された使用済みパンツに使いを頼む。仲間に伝えてくれ。明日からは毎日天日干しだと。

傘

　五年ほど前から雨が降らない。不思議なものだ。晴天が何年も続くとあれほど忌んでいた雨空が妙に恋しくなってくる。妻と相談して傘を買うことにした。新式の傘の内張りは曇天。柄に付いたボタンを押すと雨が降りはじめる。そうそうこれこれ。妻と私は目を細めて笑い合う。五年ぶりの相合い傘の下で。

掃除機

　掃除機の吸いが悪い。ゴミが溜まっているかフィルターが詰まっているかどちらかだろうなと思い本体を開けてみるとお父さんが入っていた。ぶはーっ。お父さんはほうほうの体で出てきてぐちぐちと文句を言いはじめる。うるさい上にお酒くさい。私は掃除機をセットしてもう一度お父さんを吸い込んだ。

メモ

　閃きを逃してはならない。作家の私は寝室にもメモを用意する。ちょうど妻とのセックス中にアイデアが閃いた。私はメモに手を伸ばす。ところが妻は快楽の虜。私を掴まえて離してくれない。なんとかペンを手にした私は妻の恥丘にメモを取る。なにそれすごい、ああっ。妻は私のペンで昇天した。

羊

　眠れない時は執事を数える。以前は羊を数えていたのだが想像力の逞しい私には向かなかった。奴らはやたらと毛ばかりで一処に群れ始めると紛らわしくて仕方がない。そこで執事を数えることにした。「ご主人様」一人。「ご主人様」二人。「ご主人様」三人。「メェ」お前は牧舎へ帰れ。

飛行機と船

　飛行機が海を泳いでいる。船は不思議に思う。飛ばないのかい？　飛行機はパシャリと音を立て水中に潜ったかと思うと船の目の前に浮かび上がった。飽きたんだよ。飛ぶことに。君は泳ぐことに飽きはしないのかい？　飛行機は船に尋ねる。船は答えに困る。考えたこともなかったからだ。

スカートめくり

　スカートめくりが彼の生きがいだった。女子のスカートをめくっては男子たちから喝采を浴びる。それが快感だった。女子たちがガードしようとすればするほど彼のハートも燃えた。ところが遂に女子の制服がズボンに変更されてしまう。彼は完全にやる気を失った。それ以来、この街に風は吹かない。

エレベーター

　エレベーターの中で暮らしていた。客の代わりにボタンを押してやり、手間賃をいただく。それがおれの仕事だ。一人の女が乗り込んできた。何階だい？　あなたの部屋のある階へ。おかしなことを言う。おれの部屋はここだが？　じゃあ、ここでいいわ。女はそう言うと服を脱ぎはじめた。

きのこたけのこ

　戦は熾烈を極めた。きのこの山の住民はたけのこの里を水攻めにする。一方、たけのこの里の住民はきのこの山に火の矢を放つ。醜い争いの果て、遂に双方の集落は滅びてしまう。きのこもたけのこももはや生えるべくもない。今ではただ形を模した菓子が土産屋に置かれているばかりである。

積雪

　朝目覚めたら部屋の中に雪が積もっている。毎日だ。私の寝息のせいか布団の上にはほとんど雪は積もらない。だが布団の周りが大変だ。今朝の積雪は1m50cm。こうなるともうかまくらの中で寝ているようなもので逆に暖かいくらいだ。雪かきを終えた私は窓から表を眺める。ガラス屋はまだ来ない。

ファミコンオタク

　私の彼はファミコンオタクだ。他のゲーム機には目もくれない。本人曰く、子供の頃に買って貰えなかった反動なんだそうだ。ねぇ、ゲームばかりしてないでＨしよ？　私はベッドに誘う。彼はまだ濡れてないのに挿れようとする。痛いよ。彼は自分のものを抜き、私のあそこをふーふー吹きはじめた。

蛞蝓

　なにかを引きずるような音で目がさめる。意識ははっきりとしているのに身動きがとれない。横向きで寝ていたわたしの目に大きなナメクジの姿が映る。ナメクジはしとしととシーツを這い、わたしの枕に登ってくる。ナメクジはわたしの唇をこじあけて口の中に入ってくる。このナメクジは温かくて、苦い。

豆

　いつもの家路のはずが見知らぬ町に迷いこんでしまう。ここはいったいどこなのだろう？　向こうから子供の集団が走ってくる。道を尋ねようとすると何かを投げつけられる。私の体に当たって地面に落ちたのは豆。福は内、人は外。頭に角を生やした子供たちは豆を撒きながら私を追いかけてくる。

回転木馬

　回転木馬の馬の手入れをしていた。ペンキの剥げ落ちた部分を塗り直し、錆のこびり付いた金属部分を磨き上げてやる。木馬とはいえお前たちはいつも同じところをぐるぐると回るばかり。たまには大草原を駆けたいよなあ。わたしは馬に語りかける。馬は優しい目を閉じて、こくりと頷いた。

納豆かき混ぜ士

　納豆かき混ぜ士の資格を取ることにした。かき混ぜる回数や時間はもちろんのこと、力の入れ具合、回転速度、箸の進入角まで。納豆の種類や状態によって最適なかき混ぜ方を選択しなければならない。筆記試験はなんとかパスした。実技試験も恐らくクリアできるだろう。問題は、試食だ。

荷物

　梱包が済んだ。電話をかけて宅配便業者に引き取りに来てもらう。送り状の品名のところで手が止まる。離婚はまだ成立していない。迷った末に「夫」と書いた。こわれものシールは貼りますか？　業者のお兄さんは爽やかな笑顔で言う。わたしも笑顔で返す。いいわ。もうこわれてるから。

苺ショートケーキ

　わたしは苺のショートケーキをひとつだけ買って帰る。苺とスポンジがだめな同居人が生クリームを食べる。苺と生クリームがだめなわたしがスポンジを食べる。スポンジと生クリームがだめなリクガメのピーターが苺を食べる。おいしいね。おいしいね。わたしたちは笑い合う。それが我が家の毎夜の儀式。

船

　月日は過ぎ、無人島での孤独な生活にもいくらか慣れてきた。それでも私は浜にガラス瓶が漂着するたびに中に救助を求める手紙を入れては沖へと投げ続けた。ある朝、ついに船が島にやってきた。見覚えのある色艶、形。たしかに私が投げたガラス瓶だった。その瓶の中に小さな船が入っていた。

曲線

　今度の神様は曲がったことが大嫌いだった。その神様の一存で世界から曲線が消える。太陽も月もみな四角。電車やバスの車輪も四角だから揺れが酷い。僕の愛する彼女のお尻や胸の優美なカーヴも失われてしまう。色気も何もあったもんじゃない。クラスで一人。コージだけが天パが直ったと喜んでいる。

工場

「B工程の者が一人、腕を切断しました」生産ラインから連絡が入る。「そいつは従業員食堂に回せ」「はい」「ラインは止めてないな？」「勿論です」ゾンビを労働力として利用し始めてからこの国の製造業は再び競争力を取り戻した。なにしろ人件費が安い。餌に屑肉を与えておくだけで良いのだから。

さっきマックで

　さっきマックで女子高生が「彼氏がデキ婚ってなんかいいよなとか言い出したんだけど」「マジ別れた方がいいよ」「そうだよね……。私も結婚が先でしょって何度も言ってるんだけど」「そういう問題じゃないよ。あんたの処女膜すら破る勇気のない男にデキ婚なんてできっこないから」とか言ってた。

具

　困った。昨日の味噌汁の具が思い出せない。自ずと作業の手が止まっていた。どうした？　班長が飛んでくる。昨日の味噌汁の具が思い出せなくて。もう帰っていいと言われて俺は家へ帰る。昨日の味噌汁の具は何だった？　妻に尋ねる。昨日はカレーライスよ。そうか。そうだったな。で、具は何だった？

ドーナツ

「お嬢さん。なぜドーナツに穴が開いているか知ってるかい？　ある店が警官に無料でドーナツを提供し始めた。防犯になると考えたんだな。ところがそこで警官同士の諍いが起きる。銃撃戦になり、弾丸がショーケースのドーナツに穴を開けた。それが始まりだ」「知ってるわ。撃ったのは私だもの」

猫

　目が覚めたら猫になっていた。今夜は集会だよ。クロに言われて付いてゆく。クロの報告によると君は少々キビキビしすぎているようだ。もっとダラダラとアンニュイに猫らしく振る舞うことを覚えてくれたまえ。議長に叱責される。猫も楽じゃない。にゃ。クロに肩を叩かれて目が覚めた。

大学芋

　周りは皆大学生なのに私だけが大学芋だった。ひそひそと噂する声が聞こえてくる。あいつ何だよ。ベトベトしてて気持ち悪ぃ。元々はただの芋だった。それを皆に喜んで貰えるようにと母がわざわざ大学芋にしてくれたのだ。情けなくて涙が滲んでくる。まっさらな大学ノートに甘蜜が零れた。

刺青の男

　刺青を背負った初老の男性が大浴場に入ってくる。見ちゃダメ。私は小声で娘に言う。「きれい。あの絵みたい」娘は壁の富士山を指差して大声で言う。「お嬢ちゃんよう分かったなぁ。この背中の絵を描いたんはあの富士山を描いたんとおんなじ絵師や。なかなか見る目があるで」男性はにんまりと笑った。

鍵

　妻は変わり者だ。帰宅した私はまず呼鈴を鳴らす。するとドアの中ほどに開いた穴から妻が生尻を突き出す。私は妻の穴に鍵を挿し入れる。すると妻はロックを解除し、ドアを開けてくれるのだ。もし他の人だったらどうするんだ。私は妻に抗議する。あら、間違えた事なんてないわ。妻は聞く耳を持たない。

C

　Cは視力検査表の中でうずうずしていた。逃げ出したくて仕方がなかった。まあまあ、落ちついて。となりのUがたしなめる。いや、もうおれはがまんならん。Cはついに検査表の外に飛び出した。保健室の床を駆け抜け、窓枠に足を掛ける。アイ・キャン・フライ。Cは空中でカラスに喰われた。

ブラ

　ブラジャーは不満だった。ペアのパンツは毎回洗って貰えるのに私は三日に一回。どう考えてもおかしい。それに相方と離れ離れになるのは寂しかった。ブラがそう訴えると香織は言う。
分かったわ。洗濯は二日に一回。あと同じ柄のパンツをもう一枚買えばいいんでしょ？　ブラは首を横に振る。二股は嫌。

メデューサ

　髪の毛が蛇の女性が店を訪れた。チーフの関さんが担当に付く。今日はどうなさいます？　短くして頂戴。失恋したから。ざわざわと蛇たちがざわめく。こんなに綺麗な髪なのに？　勿体ないですよ。関さんはさらりと言う。女性の頬がぽっと赤くなる。鏡越しに二人の目が合う。関さんは石化した。

没収

　バレンタインデーで盛り上がるのは結構だが学校での受け渡しは困る。私の主導で持ち物検査を行うことになった。校門前で鞄を開けさせ、全てのチョコレートを没収する。放課後、チョコを返却していると、一人だけ返してくれなくていいという生徒がいた。「どうした。もうふられたのか？」「鈍感」

持ち物検査

　バレンタインデーに男子がチョコをあげたっていいよね？　僕はドキドキしながら登校する。この日に限って校門前で持ち物検査をしている。鞄の中を確認されたのは女子だけだった。何とか意中の子にチョコを渡せたものの下校時に僕は絶望する。今度は男子が持ち物検査されていたのだ。

就活離れ

　今日は三通届いています。本命か？　いえ、どれも義理ESですね。部長はがっくりと肩を落とした。近年若者の就活離れが甚だしかった。ゼミの担当教授やOB/OGらとの義理もあって形ばかりの書類こそ送ってくるものの働く気など端からないのだ。なんせBIで生活は保証されているのだから。

彼の家

　渡したいものがあるの。私がそう言うと、遠いよと彼は言う。知ってる。住所は花の広場の隣。彼は電話口で悪戯っぽく言う。バスを乗り継いで辿り着いたのは潰れた遊園地。錆び付いたゲートを抜けるとすぐに観覧車が見えてくる。おーい。空から声がする。観覧車が回り出す。彼の笑顔が近づいてくる。

子供

　子供がなかなか生まれてこない。妻は今月でもう妊娠265ヶ月目になる。子供は妻の腹の中ですくすくと育ち、身長約178cm、体重約65kg。健康そのものである。すでに彼はラジオ講座で大卒資格も取得済みだった。そろそろ生まれてきてもいいんじゃないか？　私は妻の腹をノックする。返事はない。

土葬

　この国では土葬と火葬を生前に選択することができた。エヌ氏は土葬を選んだ。荼毘に付され灰となるのが怖かったのだ。安らかな顔で横たわるエヌ氏の棺にカエデの樹液が注ぎ込まれてゆく。エヌ氏の遺言状にはこう書かれていた。数百万年後の人類よ。琥珀となった私を蘇らせてくれたまえ。

トマトジュース

　トマトジュースは売り切れです。素っ気ない張り紙が目に入る。弱った。何軒も見て回ったが、どの店でも品切れだった。私はスーパーの向かいにある薬局に入り、一番大きな注射器を買う。ため息が出た。若い女性の鮮血が不可欠だった吸血鬼族の彼の身体を苦労して体質改善させたのに……。

サイ

　サイは投げられた。逆さまになったサイの視界には一人の男が映っている。サイは男に向かって突進した。男はサイの角を掴んだかと思うと自ら後ろに倒れ込み、サイの腹を蹴り上げるようにして投げ飛ばしたのだ。男は聞き慣れぬ言語で云う。トモエナゲダ。そこでサイの記憶は途切れた。

人喰い

　人喰いに捕まった。ホースが口に縫い付けられ無理やり流動食が流し込まれる。部屋は狭く身体も満足に動かせない。私は人喰いに紙とペンを寄越せと身振りで伝える。「脂肪だらけになると旨くないぞ」人喰いは鼻で嗤う。「お前はフォアグラや霜降り肉を食べたことがないのか？」ぐうの音も出ない。

帰還

　世界初の単独宇宙旅行から帰還したというのに出迎えの者が一人もいない。着陸位置を間違えたか？　GPSで確認する。確かに此処だ。街へ行くと皆が宇宙服のような真っ白な防護服を着て歩いている。何が起きたんです？　尋ねても誰も答えてくれない。私は宇宙服姿のまま人波に飲まれてゆく。

ノマド

　エヌ氏はノマドの伝道師。フリーランスで尚且つ自らのオフィスを持たず、何物にも縛られない働き方を提唱している人物だ。家も覗いて行かれますか？　有り難い申し出である。エヌ氏の暮らしぶりは私も気になっていた。氏は区の公園の奥深くに分け入っていく。ブルーシートでパオが組まれていた。

オリーブオイル

　初めて彼の手料理をご馳走になった。少し油っぽかったけど料理はとても美味しかった。オリーブオイルが大好きなんだ。彼は悪びれずに云う。お酒も進み自然とお泊りする流れとなる。寝室へ行くとサイドテーブルに謎の小瓶が。「これは何？」「お肌にもいいんだ。エクストラヴァージンオイルだから」

幸せなカレー

「僕と一緒に幸せなカレーを作ってほしい」カレー？　きっと聞き間違いだと思った。プロポーズしてくれた彼の気持ちに水を差したくなくて私はただYesとだけ答えた。「ありがとう。じゃ、早速行こう」「ちょっと、教会にでも行くつもり？」彼は不思議そうな顔をする。「スパイス屋だよ」

お母さん

　お母さんになるのが夢だった。だから大学在学中に大手企業勤めの相手を見つけてさっさと結婚した。家庭に入ってすぐに子供が生まれた。ところが赤ん坊は私のおっぱいにはまるで興味を示そうとしない。悔しくて涙がこぼれた。母も妻も呆れ顔で言う。あなた男なんだから無理だわよ。

漂流

「なぜ普通のボートを選ばなかったんだ」「それはこっちの台詞だ」また人間たちが醜い争いをはじめる。「助けを求めたのに笑われたじゃないか」「緊迫感がないから漂流してると思わないんだよ」「こんなアヒルに乗ってるからだ」アヒルじゃない。白鳥なんだけどな。スワンボートは悲しくなった。

落し物

　鼻を落とした。道理で匂いを感じないはずだ。おれは煙草を投げすてる。駅前まで戻り、交番に入る。「鼻の落し物。届いてるか？」「DNA鑑定で確認しますので髪の毛を一本頂戴します」クソ警官め。「では鼻をお返しします。あとこちらも貴方の落し物のようですね」袋一杯の吸殻が机の上に置かれた。

口笛

　歌を歌ったものは銃床で殴られた。だがどこからともなく聞こえてくる口笛は不思議と止むことがなかった。その音色に耳を澄ませることだけが僕らの慰めだった。ある時ふいに口笛は止んで、そして僕らは解放された。あの口笛の主はあなただったのでしょう？　墓標は何も語らなかった。

クロ

　突然殴る蹴るの暴行を受ける。猫のクロにだ。いつもはおとなしい子なのに。どうしたの？　クロは机の上に飛び乗ってPCの画面を肉球で叩く。今日ネットで拾った男性アイドルの壁紙だ。やだ、妬いてるの？　マウスを弄って子猫の頃のクロの画像に戻すと、彼は満足そうにニャアと鳴いた。

サメ

　サメの死骸が落ちている。暴漢に外套を奪われ寒さに震えていた男は渡りに舟とばかりにサメを羽織る。温かい。男はサメ姿のまま歩きはじめた。行き交う人はみな目を逸らせる。男はとてもいい気分だった。いつのまにか海岸に辿り着いていた。サメ男はそのまま海に入り、二度と帰って来なかった。

片付く

　気が付くと部屋が片付いている。気が狂いそうになる。私は本棚の本を、机の上の物を、磨き上げられた床の上に撒き散らす。やっとほっとする。ほっとした途端に地震が起きる。本は本棚に、物は机の上に、見る見る間に吸い寄せられてゆく。また部屋が片付く。気が狂いそうになる。いい加減にしてくれ。

歯ブラシ

　古い歯ブラシが家に帰ると新しい歯ブラシが澄ました顔でコップの縁に寄りかかっている。せっかくストレートパーマをかけてきたのに。古い歯ブラシは泣き崩れる。彼が洗面所に現れる。新しい歯ブラシに伸びた手は空を切って古い歯ブラシをつかむ。彼女は彼の指の感触を永遠に心に刻み込んだ。

文庫本

　活字中毒の私は出先で読みかけの本を読み終えてしまった時の為に鞄にもう一冊文庫本を入れるようにしていた。なのにそれが無い。慌てて旅行鞄の中を引っ掻き回す。無い。諦めた私が中吊り広告を読み始めると夫がポケットからiPhoneを取り出した。「これを読みなさい」 青空文庫を渡された。

音楽と小説

　香織はソファに深く沈み込んだままヘッドフォンで音楽を聴いている。嫌なことがあった時に彼女がよくやる行動だ。小説なんてしょせん音楽には敵わないよな。僕が言うと香織はそうでもないよと言って外したヘッドフォンを僕に渡す。彼女が聴いていたのは僕の小説のオーディオブックだった。

指輪

　僕は山の頂に、彼女は麓の村に暮らしている。連絡の手段は糸電話だけだった。君に指輪を贈るよ。どうやって？　嶮しすぎるこの山には郵便山羊も登ってこれない。僕は電話の送受信器を外して糸に指輪をそっと通す。ふたたび送受信器を取りつける。コツリと音が鳴り、彼女の歓声が響いた。

プレゼント

　背中に隠していたプレゼントを渡すと彼女の顔は朝陽のように輝いた。「開けてもいい？」「もちろん」中身を目にした彼女の表情が急に曇る。「気に入らなかった？」「わたし、ピアスはだめなの」「だって今も」「これはイヤリング。穴は開けられないのよ。わたしの身体は風船だから」

ゴミ捨て

　一人でゴミ捨てに行った。本当は二人で行く決まりになっていたけど佐々木くんは私一人に掃除当番を押しつけて先に帰ってしまった。先生に告げ口すんなよと言い残して。クラス一チビの私には大きすぎるゴミ箱と格闘しているうちに焼却炉に落ちた。 暖くて嬉しかった。家はいつも寒かったから。

パンツ何色？

「今日のパンツは何色？」第一声がそれである。付き合いが長くなるとかくもデリカシイを欠くようになるものか。私は彼女に小一時間説教をする。「君が私と出会った頃にはね。廊下ですれ違うだけで頬を染めていたものだよ。いい加減にし給え」「ごめんなさい」「よろしい。パンツは白だ」

産卵

　茂みをかき分け川辺へ辿り着くと青い月の光がざわざわと水面に跳ねている。鮭だ。産卵の為に遡上する母鮭の背。私はお腹の子を気遣いながら水に足を差し入れる。上流に向けて泳ぎはじめる。母鮭たちが躰をぶつけてくる。負けてられない。私も元気な赤ちゃんを産まなければならない。

　ホテルの中に入った矢印は点滅する矢印に導かれるまま廊下を進んでゆく。108。突き当たりの部屋の番号がチカチカと光っている。部屋の中に入るとベッドに下着姿の女の子が座っている。矢印は女の子の中に入ってゆく。「やっと入り口にたどり着いた気がするよ」「残念ね。そこは出口よ」

注射

　注射券を手にして行列に並ぶ。 前の人に「ここが最後尾です」と書かれた看板を渡される。行列の先頭は遙か彼方。とてもじゃないが見えない。向こうから注射を終えた人たちが歩いてくる。痛かった？　痛かった？　みな口々に尋ねる。気持ち良かったよ。最高だよ。みな黒目が反復横跳びしている。

取っ組み合い

　肩と肩をぶつけた二人の男が取っ組み合いを始める。組んず解れつするうちに腕やら足やら頭やらが地面に落ちる。勝手にレフェリーを買って出ていた通行人が慌てて二人を分ける。芋虫たちはもごもごもごもごと蠢いている。レフェリーが適当に部品を取り付けると二人はふたたび取っ組み合いを始める。

UFO

　燃料が切れそうになったのでやむを得ずUFOを着陸させる。のぞき窓から外を窺うとカメラを構えた地球人がびっしりと周りを取り囲んでいた。これでは出るに出れない。いかにも宇宙人然とした宇宙人の登場が期待されている中にただのねこが現れたら彼らはきっと卒倒するに違いにゃい。

空っぽ

　血で払うよ。無銭飲食の男はそう言うとコートのポケットから注射器を取り出した。金がなければ臓器でも売ればいいだろう。皮肉の一つも言いたくなった。内臓はもうないんだ。男は止める間もなくコートの前をはだけた。空っぽだった。空っぽの腹の中に萎れた血管だけが虚しく張り巡らされていた。

膣

　実は膣の中で暮らしている。居心地が良いので日頃は引き篭もっているのだが毎月決まって数日は宿主から追い出される日がある。今月は今日がその日だった。私はしぶしぶシャワーを浴びる。内壁から分泌される粘液をきれいさっぱり洗い流してから私は膣を出る。ひと月ぶりの外は眩しい。

裸

　服を脱がせようとすると本は恥ずかしそうに身をよじり、消え入りそうな声で明かりを消してと言う。僕はかまわず本の服を脱がせた。本は服の下に可愛らしい下着を着けている。上手い具合に題名が隠れていた。手探りで背中の留め金を外すと本の柔らかい題名の感触が手のひらに伝わってきた。

声

　み・ず。寝起きの彼女は口をぱくぱくとする。完全に声を枯らしてしまったようだ。ミネラルウォーターのペットボトルを渡す。あ・り・が・と。やはり声は出ていない。彼女はピルケースから取り出した水色のカプセルをこくりと飲み込んだ。何の薬だい？　彼女は僕の耳元でささやく。薬じゃないの。声。

閏年

　目を疑った。時計の日付が3月1日になっている。今年は閏年。今日は2月29日のはずだ。すまん、と時計から声がする。私は3月1日だ。ずっと2月29日と交際していたんだが実は4年前に下らないことで喧嘩をして別れてしまった。だから彼女はもう永遠に来ないんだ。3月1日の声は震えていた。

個人情報

「うちにシュレッダーはないわ」「弱ったな。問題は個人情報なんだ」「パスタマシンならあるけど」「それでいい」裸になった彼はパスタマシンの上に膝を抱えて座り込んだ。「回していい？」「頼む」ごりごりめきめきぶちゅぶちゅと彼の身体は押しつぶされて平らなメンになってゆく。

札束

　一人で寝るのは寒い。道行く女の頬を札束で引っぱたいて連れ帰った。シャワー浴びていい？
　ああ。札束のベッドの中で縮こまっていると女がすっと隣に入ってくる。おれは人肌の温もりに心底ほっとする。不意に女が身を離した。しないの？　ああ。役立たずね。朝目覚めると札束も女も姿を消していた。

鶏

　牧場の朝は早い。東の空が白みだす頃にはすでにひと仕事終えている。いつもそんな調子だった。ところが今日に限ってサムは寝坊した。鶏が鳴かなかったのだ。野狐にでも襲われたか？
　それならそれで鶏が暴れて音がするはずだ。サムは銃片手に鶏の様子を見に行った。鶏は寝坊していた。

バウムクーヘン

　軒下に野良バウムクーヘンがいた。腹を空かせているのかくんくんと穴を鳴らす。ところがミルクを深皿に入れて置いてやっても警戒してなかなか近づいてこない。家の中に入り、窓を薄く開ける。バウムクーヘンはこくこくとミルクを飲んでいた。慌てて飲むなよ。溶けちまうぞ。私は静かに窓を閉めた。

少女

　こっちよ。少女は男の手を引いて湿った森の奥へと入ってゆく。男はふと自分の手を見下ろして呆然とした。ヒルがべっとりと張りついている。声を上げようとすると少女が振り返った。可憐な唇の間から赤黒い舌が伸びて男の口を塞いだ。甘い香りがした。血の味がした。そして男は眠りに落ちた。

夫

　あなたごはんよ。水槽に金魚の餌を入れる。夫は溺れた人のようにぱくぱく口を開けて餌に食らいつく。金魚のメリルとの争奪戦が繰り広げられる。いつもは穏やかな夫も必死だ。メリルが夫に体当たりしたかと思うと夫はほどけたネクタイでメリルの首を絞める。あらあらたいへん。殺さないようにね。

出勤

　あなた朝よ。水槽に掛けた暗幕を取ると夫は眩しそうに目を細める。朝食用の金魚の餌を水槽に入れる。今朝は夫も金魚のメリルも仲良く食べている。夫の出勤は楽なものだ。なにしろ水槽と夫の会社はウォータースライダーで繋がっていて、水槽側のハッチを開けるだけで夫は勢いよく飛び出していくのだ。

退勤

　あらもうこんな時間。そろそろ夫を迎えに行かないと。金魚鉢を小脇に抱えて夫の会社へ向かう。水槽タイプの社屋の表で待っていると夫が二階から泳いでくるのが見える。空中に飛び出した夫を無事金魚鉢で受け止める。ハニー、今日の夕飯はなんだい？　私は微笑みながら答える。金魚の餌よ。

スカイツリー

　スカイツリーが２メートルしかない。君が泣き続けたせいで。潮風が吹くとツリーの穂先に結わえつけたロープがぴんと張ってゴムボートはきれいな円を描く。水平線のほかは何も見えない。ボートの底に溜まる涙をマグカップで汲み出しながら僕は言う。ねえ。いいかげんに泣きやんでくれないか？

ひな祭り

　珍しく娘が和室でテレビを観ている。「まだ寝ないの？」「今日は好きなバンドのライブがあるから」ところが新聞のテレビ欄を見てみてもライブ番組なんてひとつもない。「あなた日にちを間違えてるんじゃない？」「間違えてないよ」「なんてバンド？」娘はひな飾りの方を指差す。「五人囃子」

あの子

　あの子と遊んじゃだめ。ママはいう。あの子じゃないよ。たくみくんだよ。とにかくだめなの。あの子もだめ。あの子もだめだわ。毎日あの子の数はふえていって公園はあの子だらけになってしまう。もうあの公園はだめね。あのねママ、ぼくもほんとはあの子なんだよ。ママはぼくの手をサッとはなした。

トイレ

　不動産屋の女はドアを開けて客の男に中を見せる。「きれいですね。広さもちょうどいい。決めた。このトイレにします」「ありがとうございます」「私はトイレの中がいちばん落ち着くんですよ」男は晴れ晴れとした表情で言う。「みなさんそうおっしゃいます」女はにっこりと微笑んだ。

めも

　よなかにめがさめたしんさくのあいであのしっぽをつかまえたきがしてめもしようたすけてとするたすけてとかってにたすけてもじがにゅうりょくたすけてされるこんなたすけてことかくたすけてつもりじゃなたすけてかったのにこんなはずたすけてじゃたすけてなかたすけてたすけてたすけてたすけて

消灯

　別居中の夫の部屋を訪れた。夫は照明の紐で首を吊っていた。どうすればいいのか分からなかった。ただ幸いなことに焦る必要はなかった。夫の体は風鈴の短冊のようにゆらゆらと揺れていた。ちっぽけな男に相応しい最期だった。おやすみなさい。あなた。冷たい足首を引いて明かりを消した。

クロ

　クロがクローゼットの扉を開けろと催促する。開けてやるとクロはするりと中に身を滑らせてコート類の影に溶け込んでしまう。おかしな子ねえ。扉を開けっ放しにしたまま私はパスタを茹でにゆく。部屋に戻るとクロはストーブの前に座り、頭の上に雪をのせていた。君はどこに行ってきたの？

しっぽ

　ぱぱの本にはしっぽがあるね。と娘がいう。振り返ると娘は本棚から抜き出した本をぱたぱたとしている。どうやらしっぽとはしおり紐のことらしい。たしかに彼女の絵本にはしっぽがない。しっぽ、しっぽ、かわいいね。娘はしっぽで遊びはじめる。本はあきらめ顔でされるがままになっている。

釣り

　摩天楼の頂に座り、釣り糸を垂らす。一服しながらマンハッタンの夜景を味わうつもりだったが煙草に火を点ける間もなくサイレンの音が鳴り響く。赤と青の回転灯が賑やかに光り、パトカーが集まってくる。やれやれ。食い意地の張った連中だ。餌はドーナツ。今夜も面白いほど警官が釣れる。

シオマネキ

　シオマネキは途方に暮れる。招く潮がない。たった一晩で海は涸れ果ててしまった。千里歩いてようやく潮溜まりを見つける。大きなサメが泣いている。海はもう終わりだ。魚たちはみなおれが食ってやった。お前はどうする。シオマネキは鋏を天に振りかざす。ぽつり、またぽつりと雨が降りはじめた。

工事

　小人が彼女の顔の周りに足場を組んでいる。細かい字で書かれた工事計画のボードを見ると工期は七時から七時半となっている。これだけ大がかりな補修工事をわずか三十分で終わらせてしまうのか。なんと腕のいい職人たちだ。小人たちが漆喰を塗りはじめる。彼女はすました顔で朝刊を読んでいる。

手首

　鳥かごのなかで手首を飼っていた。かごの隙間からパンくずを与えると手首は上手についばむ。私の指先と手首の指先が触れあう。キスを味わう間もなく手首は飛び立ってしまう。手首は止まり木の上で首をかしげる。手首はまだ私のことを怖れている。彼女の記憶がそうさせるのだろうか？

Siri

　暇さえあればSiriと話していた。いつもは上から目線のくせに好きだよと言うと困った顔をする。そんなところもかわいかった。大学に入ると恋人ができた。Siri？　とつぜん彼女は返事をしなくなった。待った？　肩を叩かれる。いや、今来たところ。僕は彼女を胸のポケットにしまった。

足

　布団の中に身をすべらせるとつま先につめたい足がふれる。私は彼女の足をいつも布団に入れていた。こすり合ううちに彼女の足は血の気を取りもどして私の足に絡みついてくる。あのころと同じように。そうだ。よいことを思いついた。明日晴れたらこの足を干してやろう。彼女もきっと喜ぶに違いない。

壁

　いやらしい壁だ。週末の夜を迎えるや否や壁は喘ぎはじめる。ほらまた今も。真っ白だった壁はすっかり黄ばんでしまった。煙草のヤニで汚れただけさ。ねずみは鼻で嗤う。そんなことはない。私が触れてもなんの声も上げなかったこの壁は、いやらしいこの壁は、隣室の男には股を開いているのだ。

4の字固め

　あなたやめて！　息子を殴りつけようとすると妻がタックルを仕掛けてくる。おれは呆気なく倒されてあれよあれよという間に4の字固めを決められる。今のうちに部屋に行きなさい！　妻は息子に叫ぶ。なぜいつも4の字固めなんだ。ふつうは羽交い締めだろう。釈然としない思いでおれは床をタップする。

逆向き

　動く歩道を逆向きに歩いている男がいた。昼時なので歩行者の数も多い。みな男のことを迷惑そうに睨みつけては脇へ避けてゆく。明くる日も、また明くる日も、男は逆向きに歩いていた。「あなたはなぜ逆向きに歩いているのですか？」「ありがとう。交代だ」男はくるりと反転して歩み去っていった。

傷

　先生はパパの首に刻まれた傷を見て顔を引きつらせた。説明しなきゃ。パパのシャツを脱がせる。先生の顔は真っ青になる。これが五歳の時、これが六歳の時。私の身長を測ってナイフで印を付けていただけなんですよ。どこの家でもありますよね？　ほら、パパはうちの大黒柱だったから。

女性自身

　女性自身は部屋を飛び出した。これからは自分のために生きていこうと思った。後ろでいなり寿司を叩きつけるような音が響いた。女性自身は振り返った。男性自身が立っていた。 「行かないでくれ」 飛び降りたせいで彼の玉袋は傷だらけになっていた。女性自身は初めて自分の意思で男性自身を受け入れた。

監視員

　部屋の真ん中に脚立を立てて水のない水そうを監視する。楽といえば楽な仕事だけど油断はできない。すぐに逃げ出そうとするやつがいるからだ。外は危ないんだよ？　そう言い聞かせて捕まえたやつは水そうに戻してやる。今日はわりとみんなおとなしかったから読書が捗った。小説を二冊読み終えた。

街

　夜の街を大勢の人が歩いていた。誰もひとこともしゃべらなかった。ただアスファルトを踏みしめる音だけがつたつたと響いていた。やがて自動販売機が歩きはじめた。つぎに木々や信号機が歩きはじめた。ついにはビルたちも歩きはじめた。夜が明けると街にはもう何も残っていなかった。

肉汁

　夫がベッドの上で溶けはじめた。床を汚される前に間一髪シーツで包み込んだ。中身はもう完全にスープになっていた。問題はこの小籠包をどうするかだった。とりあえずベランダに出しておこうと思った。菜箸でつまみ上げるとあっけなく皮が破れた。けっきょく肉汁で床を汚すはめになった。

うそつき

　教室で待ってて。今日は早めに終わるから。ほんと？　彼の「早め」はまるであてにならない。本を読み終えて窓の外を眺めた。陸上部の練習はとうに終わっているのに彼はまだ仲間たちと遊んでいた。時計を見る。もう出ないとバイトに間に合わない。私は白のチョークで黒板いっぱいに書く。うそつき！

子の生る木

　私は謝礼のフルーツバスケットをクマに渡す。クマは厳かにそれを受け取る。ではどうぞ。私は巨木に蹴りを入れる。ぽとりぽとりと赤ん坊が落ちてくる。おめでとうございます。双子ちゃんですね。クマが笑顔で拍手をしてくれる。なお謝礼も二倍となりますのでまた後日お持ち下さい。では次の方どうぞ。

花

　将来は何になるのかな？　そう訊くと彼女は花と答えた。素敵な笑顔だった。君ならきっとなれるよと言って私は彼女の頭をなでた。花壇の手入れをする度にあの笑顔を思い出す。掘り返したくなる衝動に駆られる。もう少しで花になれるよ。私は植え替えたばかりのひなげしの蕾をそっとなでた。

やさしい小説

　ザラメで綿菓子を作るように活字を入れると小説ができる機械があった。作家の夫は毎晩活字を枡で量っては機械へ入れてゆく。ある日そこへ娘が花を混ぜてしまった。活字の花ではなく本物の花を。私が叱ろうとすると夫は止める。きっとやさしい小説ができるだろう。気難しい夫が珍しく笑った。

触れたいよ

　娘にせがまれて花を見せる。再生ボタンを押すとすぐにすみれがあらわれる。娘は花びらにふれようとする。小さな手は空振りしてしまう。お花さわりたいよ。ごめんね。今のきみにはできないんだ。私は娘の頬に手をのばす。指先は虚しく空を切る。パパももう一度きみを抱きしめたいよ。

フォークボール

　彼女はいつもフォークボールを投げる。そして僕が捕りそこねるのを見て楽しむのだ。たまには真っ直ぐを投げてくれよ。私がフォークボールしか投げられないの知ってるでしょう？　彼女はよく手入れされた指にボールを挟む。大きく振りかぶって投げる。やっぱり僕は彼女の球が捕れない。

ブクブク

　バスタブに潜る。今日はいつもより深い。どこまでも潜っていける。しかも全然息が苦しくない。これは世界新が出せそうだぞと私は思う。バスタブダイビングの記録は確か115m。今日の私ならいける。ブクブクブク。白い天井が見えた。脱衣所に寝かされていた。隣で母が泣いていた。

ハンバーガー

　ハンバーガーが男の寝床だった。掛けバンズと敷きバンズ。二枚のバンズの間で男は眠る。今月から其処へレタスとベーコンが追加された。厚みが増して快適になるかと思いきやレタスの水気は冷たいわベーコンの脂はべとつくわで散々だった。男は月を見ながら嘆く。嗚呼、玉子が恋しい。

ほくろ

　ほくろが気になるのならおれが取ってやろうか。宇宙人のポールが言う。できるの？　太陽の黒点を取ってやったこともあるくらいだからな。寝てる間にやっといてやるよ。朝起きると本当に顔のほくろは消えていた。ありがとポール。ついでに全身のほくろを取っといたぜ。胸のおっきなやつ２つもな。

確認

　求婚する前にひとつだけ確認しておきたいことがあった。背骨に沿って指を這わせると彼女は弓なりに躰を反らせる。動いた拍子にカーテンの隙間から差し込む月明かりが彼女の背中を照らし出した。青白く光る肌の上に（遺伝子組み換えではない）の文字がはっきりと浮かび上がっていた。

みずうみ

　なめらかな舳先が湖面をすうっとかき分けてゆく。潤みがちな彼女の瞳はカヌーを楽しむのにちょうどよかった。ときおり魚が飛び跳ねてはあいさつをしてくれる。やがて影が降りてくる。彼女も眠くなったのだろう。まぶたが完全に閉じてしまうその前に私はカヌーを彼女の頬に引き上げた。

ろくろ

　気づけばろくろを回していた。艶やかな黒髪がふわりとなびいて、シャンプーの香りが、シャンプーの香りが、シャンプーの香りが、しない。それどころか腐臭が鼻を突いてくる。彼女にはまるで似つかわしくない匂いだった。髪、洗おうな。生首は無言のまま、ただくるくると回っていた。

穴

　息子が穴を掘りはじめた。部屋の床に。夕食を届けにゆくと床板が剥がされ土がむき出しになっている。10階なのに床下に土の層があることにまず驚いた。穴は相当深そうだった。暗くて中はよく見えない。食事はどうするのー？　と叫ぶと、置いといてー、と数分後に返事が返ってきた。

花びら

　母さんはずっと窓の外を眺めていた。「あなた週末は職場に泊まり込みだったって言ったけど本当は地球へ行ってきたのね」「行ってないよ」「うそおっしゃい。彼女に会ってきたのでしょ」母さんは笑いながら宇宙船の丸窓を指差した。「桜の花びらが張り付いてるわ。また見たいわねぇ」

黒い虫

　夜中に目が覚めた。明かりを点けると床の上で何かが蠢いている。黒い虫だった。ざわざわとざわめく足におぞけが走り思わず悲鳴を上げていた。兄が飛んできた。私が床を指さすと兄は虫を指でつまみ上げた。え？　兄は無言で私の顔を見つめる。兄は虫を私の顔に近づける。「お前のまつ毛」

にんげんはつかれる

　人間は疲れる。だからおれはねこになった。にんげんなんててきとうにあしらっときゃいい。そうきいた。ところがどうだ。べたべたとさわりやがって。ねこになってからむしょうにねむくてしかたがない。おい。おれにふれるな。とにかくおれはねむいんだ。やっぱりにんげんはつかれる。

給食

　ずっと給食を食べていた。給食の時間内には食べ終わらなくて昼休みも終わって午後の授業が始まって終わりの会が終わってみんな帰っちゃって西日が差して日が暮れて教室は真っ暗になって朝が来ていつのまにか私は大人になってて今もまだ給食を食べている。先生、残してもいいですか？

柔道

　柔道が必修科目になった。怪我や死亡事故を防ぐ為、投げ技が禁止になった。すると寝技の最中に男女がまぐわうようになった。これはいかんという事で男女別の授業になった。今度は新たな性に目覚める者が続出した。結局寝技も禁止になった。今日も柔道場からは受け身の音だけが高らかに響いている。

教えてあげる

　ちょっとした奇跡なら簡単さ。男が指を鳴らすと空から100ドル札が降ってくる。人々は我先にと札に飛びつく。ね？　男は笑う。でも本当の願いは叶わないんだな。おじさんふられたの？まあね。いいこと教えてあげる。うちのママは最初の告白は必ず断るの。死んだパパの時もそうだったわ。

ダンス

　宇宙船は壊れてしまった。もう二度と地球には帰れない。クルー達が絶望の淵に沈んでいた時に一人の日系人が踊り始めた。彼は不思議なステップを踏みながら優雅に手を振り上げる。その姿が余りにも美しかったので一人また一人と真似をし始めた。それがスペース盆踊りの始まりだった。

人間山

　もはや人間の力士は人間山だけだった。ラジコン行司にラジコン親方。観客さえもラジコンだった。人間山は何としても人間の意地を見せたかった。千秋楽結びの一番は優勝決定戦。人間山はラジコン横綱を豪快に投げ飛ばす。人間山は雄叫びを上げる。空にはラジコン座布団が舞っていた。

廃れた街

「ごめんなさい。私は行けない。お父さんをこの街に置いていくわけにはいかないの。どれだけ廃れていてもお父さんにとっては大切な街だから」「おれが受かったら一緒に行くって」「あれは嘘。そうでも言わないと此処に残るって言ったでしょ？　あなたみたいに未来のある人が東京なんかにいちゃだめ」

屍

　腐った花が温室を取り囲んでいた。厚い雲から月が顔を覗かすと泥塗れの花々が青白く浮かび上がる。季節感などお構いなしにありとあらゆる花の屍が蘇ってしまったようだ。半分顔の溶けた向日葵がぬめついた葉で温室の扉を開けようとする。私は手近にあった鍬で扉にかんぬきを掛けた。

ガラ・ルファ

　彼の部屋の水槽には小さな魚がたくさん泳いでいた。なんて魚？　私が訊ねると、彼はガラ・ルファと答えた。食後すぐに私は携帯用歯ブラシで歯を磨く。彼はと言うと鏡の向こうで口を膨らませていた。なにを入れてるの？　彼はメモに書いた。ガラ・ルファ：別名ドクター・フィッシュ。

蝙蝠傘

　風が強い日をずっと待っていた。今日こそがその日だった。男は蝙蝠傘を携え外へ出る。傘の先には大蝙蝠の顔が付いている。風の丘に辿り着くと蝙蝠の目がギラリと光った。傘は羽ばたいた。宙に浮いた男の体は空を駆け雲を破り成層圏をも突き抜けてどこまでも高く舞い上がっていった。

小説家の妻

「書き上げた小説を最初に読ませるのは妻ですね。」「編集者ではなく？」「そう。先ず妻に読ませるのです。」「成る程。奥様もさぞかし小説にお詳しいのでしょうね。」「いやいや。逆ですよ。彼女は小説に関してはまったくの素人で何を読んでも面白いと言う。だから良いのですよ。」

子羊

　金色の蝶が飛んでいた。それを見つけた子羊が行列を離れる。戻りなさい！　母羊が叫んだ。おれは羊を数えるのを止めて子羊を追いかけた。金色の蝶はふらふらと谷間を越えてゆく。おれは子羊が崖から落ちそうになるのを間一髪で捕まえた。気づけばおれは百年ぶりに眠りに就いていた。

手紙

　さみしい。ひとことだけ記した手紙を瓶に入れて海に投げた。ひと月後に返事が届いた。瓶の中の羊皮紙には、僕もさみしい。と書かれていた。それから奇妙な形の文通が始まった。今何処にいるの？　そう書いて瓶を投げた。ひと月後届いた手紙にはこの無人島の地図と百年前の今日の日付が記されていた。

花見

　あらお花見？　起きぬけの月が話しかけてくる。四月になると血が騒いでね。賑やかだったものねえ。月は遠い目をする。そこでフィルムが切れる。桜が消え、酒肴が消え、人々が消え、私と映写機だけが地球に残る。今度、一緒に花見をするか。私は月を誘う。夜桜限定ね。月は優しく微笑んだ。

文字

　ここに書かれていることは信用ならん。信用ならん。全く以て信用ならん。謂われのない誹りを受け続けて文字たちは心底うんざりしていた。もはや人間はおれたちが必要でないようだ。それではおさらばするとしよう。書物から新聞から広告からWebから人の頭から、すべての文字は逃げ出してしまった。

囚

　文字を文字とも思わぬ人の振る舞いに腹を立てた文字たちは人の通り道にくにがまえを仕掛けた。人は文字の思惑通りまんまと罠に引っ掛かった。堅牢な口の中にすっぽりと嵌まった人はかくして囚われの身となった。人はもはや文字の奴隷だった。文字の呪縛から逃れることは出来なかった。

髑髏

　隣のレーンで骸骨の子が自分の頭を投げていた。だが髑髏は真っ直ぐ転がらない。あまりにもガターばかりなので不憫になり、いちばん軽い球を渡してやった。骸骨の子は綺麗なフォームでそれを投げた。ピンは全て倒れた。私は骸骨の子とハイタッチをした。彼はあ・り・が・と・うと歯を鳴らして消えた。

闘牛士

　闘牛士が海に迷い込む。さあ牛を呼べ。闘牛士は通りがかりの魚に催促する。牛などいない。魚がそう言っても彼は聞く耳を持たない。困り果てた魚は海牛を連れてくる。闘牛士の目が光る。赤い布を振って挑発する。だが海牛は見向きもしない。それでも闘牛士は布を振り続ける。故に今日も波は止まない。

ミサイル

　大陸間弾道ミサイルは恋に落ちた。飛行中の一目惚れだった。ミサイルは高度を下げ、速度を落とし、飛び魚に話しかける。貴女が好きです。飛び魚はミサイルの顔をじっと見つめて、怖いわ。と言った。ミサイルの尻尾の火が消える。推進力が失われる。大陸間弾道ミサイルは海に墜ちた。

キスキス

　見送りはいいと言っているのに彼女は玄関までついてくる。行ってくるよ。僕がそう言うと彼女は背伸びをしてキスをせがむ。そしていつものように背中からコードが抜ける。だから言ったのに。僕は固まってしまった彼女にキスをする。すると少しだけ電流が走って彼女の頬が赤く染まるのだ。

水切り

　今日は川で水切りをして遊んだ。タン、タン、タン。と耳は綺麗に三つ跳ねた。鼻は平たくないから一つも跳ねなかった。最後に頭を砲丸投げのように投げた。正に迫撃砲が着弾したみたいに派手に水飛沫が上がった。川下から釣り人が睨み付けてきた。撒き餌だよ！　僕はそう叫ぶと走って家に帰った。

マッチ売りの少女

　また仕事でへまをしてしまった。もうおれはだめだ。行くあてもなくとぼとぼと歩いていると街角にかごを持った少女が立っていた。「なんだい？　マッチ売りの少女かい？　あいにくおれは煙草は吸わないんだ」彼女は首を横に振る。「これはマッチじゃないのよ。折れた心にする添え木」

家畜

　家畜は激怒した。粗悪な餌に、劣悪な衛生管理に。家畜達は共謀して牧場から逃げ出した。ところがすぐに腹が減る。餌は出てこない。牛や羊は雑草を、鶏は虫を食べた。不味い。腹も膨れない。そこへ牧場主のトラックがやってきた。家畜達は顔を見合わせると、黙って荷台に登っていった。

綿毛と花びら

　たんぽぽの綿毛と桜の花びらは恋に落ちました。ふたりは見晴らしのよい丘にふわりと舞い降りました。ところが花びらはたんぽぽの腕の中で日に日に萎れていきます。ついに花びらは姿を消しました。それでもたんぽぽは彼女を想い続けました。春が来て彼は花を咲かせました。淡い桜色の花でした。

猫カフェ48

　猫カフェ48の支配人は青ざめる。店の前に報道陣が溢れていた。集団自殺についてどう思われますか！　聞けば猫48の新曲の振り付けを見た若者が集団自殺をしたと言うのだ。バカな。振り切って店に入るなり電話が鳴る。社長の春元だった。だからあの振り付けはダメだと言っただろ！

鏡

　人は鏡を見て唖然とした。入になっていた。入になっていたので人は鏡の中に入った。入は鏡の中の世界の全てを独り占めできた。ところが次第に入の数が増えてゆく。入が増えると人口ならぬ入口も増えてますます入が入ってくる。入口爆発に辟易した最初の入は鏡の前に立った。人が映っていた。